

優しいまち、 楽しめるまちに

日本軽金属株式会社 元社長

佐藤薫郷さん

Shigesato Sato



静岡市にゆかりがあり、東京を拠点に内外で活躍する皆様に、東京から見た静岡市の良さと可能性、まちづくりの方向について、ご提案いただきます。

銀座で絵画の個展

温厚質実、しかし負けず嫌いだ。漢字検定1級に3回続けて合格した。3回も挑戦した理由を聞くと、「まぐれで合格したと思われるのが嫌だったんです」。

日本軽金属は、わが国で唯一アルミニウムの製錬工場を持ち、アルミ加工品・化成品のトップメーカー。1973年の第一次オイルショック後、アルミ製錬一筋から二次、三次加工品をつくる総合アルミメーカーへ

と、脱皮した。

社長6年、会長2年、そして相談役を1年務めた。「会社の外見は創業時と変わらないが、中身は99%変わった。社長時代を含め、チャレンジの連続だった」と振り返る。

もともと絵と楽器が好きだったという佐藤さん。第一線を退いたのを機に、油絵(写真)とフルートの勉強を本格的に始めた。特に油絵は今年2月に東京・銀座の画廊で個展「再びの青春」を開くほどの腕前だ。「自由自在に絵が描け、これが佐藤の絵と

わかつてもらえるようになったらいい」。

「蓄積」を掘り起こせ

「同じ県庁所在地でも金沢は歴史の重みを感じる。加賀百万石の伝統、文化が蓄積され、観光・案内情報やサービスも優れている」。時々訪れる金沢市を例に、佐藤さんは「静岡は家康公のお膝元で、甲斐武田氏の影響が及んだ時期もある。蓄積されたものはあるはず。丹念に掘り起こしてみたらどうか」と提案する。

まちづくりに関しては、気候温暖、伸び伸びとした環境、交通の利便性を生かし、文教や高齢福祉にもっと目を向け、学生や研究者、高齢者に優しいまちづくりの推進を訴える。「中心部の呉服町、七間町、駿府城跡のつながりが楽しくない」と率直に指摘。「旅行者がさっと目的地に行けるよう、道案内を分かりやすくするなどして、優しくて楽しくなるまちづくりにつなげてほしい」。

新東名と新幹線のセット、1泊2日や日帰りの「おもてなしの旅」構想も。「例えば、静岡特産のフルーツ狩りや、生シラス、サクラエビなど新鮮魚介の食べ歩き。日本平や清水港で世界文化遺産の富士山の眺望を楽しむものもいいのでは」。

多くの企業の誘いを断り、日軽金を選んだ。「将来性があり、地元企業という点にも惹かれた」と佐藤さん。今なお郷土愛に燃える、静岡人の中の静岡人だ。

(文・写真：長田義明)



経歴

静岡市葵区生まれ。東京大学法学部卒。1962年、日本軽金属株式会社入社、ジュネーブ工業経営研修所留学、製錬事業部営業部長、取締役メタルセンター長、常務取締役兼アルコム社社長、専務取締役、取締役副社長などを経て2001年、代表取締役社長、07年、代表取締役会長、09年相談役、10年から同社顧問。74歳。04年、藍綬褒章受章、13年、旭日中綬章受章。